

二〇一五年一月二〇日(参加者一七名)

誓子句碑冬日の漏るる樹下ここに
大鳥居高きを仰ぐ淑気かな
着脹れて狭きベンチに割り込みぬ
御社の裏山はまだ春遠し
枝絡む日に数多なる冬芽かな
カラヤンのごと髪乱す春疾風
まず一礼して門くぐる初社
裏山へ誘ふ道は春隣
走り根にな躓きそ初社
みつばつつぢ杜の四温にちらほらと
二の腕にはたちの氣迫弓始
冬帝へ真白き鳥居高々と
山下りくる川筋に風光る
火の粉撒きとんどやぐらの崩れ伏す
百枚の棚田を統べて大とんど
骨太の墨をどりだす吉書揚
花丸の干支の字をどる吉書揚
祝詞読む神官の声冴えわたる

わかば
わかば
わかば
わかば
わかば
せいじ
せいじ
せいじ
せいじ
せいじ
菜々
菜々
菜々
うつぎ
うつぎ
うつぎ
かかし
かかし
つくし

神の杜広し嵩なす松落葉
犬好きの会話果てなき日向ぼこ
冬日燦レンガ造りの尖塔に
凍て道に立ち往生す老二人
無人市あれば寄り道踏青子
ぜんざいを食べておしゃべり女正月
寒日向揃ひ踏みする宮の鳩
御手洗の一杓口へ寒の水
親子句碑梢もる日のあたたかし
また爆ぜてとんどの前を去りがたく
宮庭に吾とすずめと日向ぼこ
初夢の友達はみな中学生
堆き裏参道の落葉踏む
春の日に千木の輝く大社かな

つくし
ひかり
ひかり
よう子
よう子
よう子
宏虎
宏虎
満天
満天
小袖
よし子
こすもす
明日香
ぼんこ

定例会のみる選

二〇一五年一月二〇日(参加者一七名)